

### 『なぜ私だけが苦しむのか 現代のヨブ記』

著者ハロルド・S・クシュナーによる本書は、1981年に初版が刊行された。アメリカで瞬く間にベストセラーとなり、出版後3年で約16万冊が発売されている<sup>1</sup>。国外でもその評判は広まり、初版から8年間で10か国以上の言語に翻訳された<sup>2</sup>。本書の原題は、『When Bad Happen To Good People. (『善良な人に悪いことが起こる時』)』で、日本では斎藤武が全訳している<sup>3</sup>。悲劇との向き合い方をさまざまな立場で考察しながら、読者に救いの手を差し伸べてくれる1冊である。

著者の娘が生まれた日に、3歳の息子アーロンが「早老症(プロゲリア)」と診断される。生後8か月頃から芳しくなかった成長や健康状態は良くなることはなく、10代の初めに死ぬだろうと医者から告げられた。当時、著者はマサチューセッツ州のユダヤ教会の教師「ラビ」に就任したばかりであったが、聖職者として人々の苦しみや死を見届ける経験を積んできた。しかし、息子や自分たち家族に降りかかる理不尽な不幸を受け入れることができず、神への信頼までも失うようになった。けれども、14歳で亡くなった息子の死をきっかけに、聖書や読んだ本、さまざまな人との会話から「不幸を生き抜くため<sup>4</sup>」の問いを検証するようになったのである。

まず、1章では人間が不幸に見舞われたときの思考について、2章では不幸との向き合い方を描いた『ヨブ記』について書かれている。人間は苦しみの原因と理由を神に求めるが、苦しみの目的を探る行為は、自分自身や被害者を納得させたい気持ちの表れでしかない。不幸の渦中にある人間が意図せずとも取ってしまう行動を、著者は『ヨブ記』を用いて3つの立場から考察している。『ヨブ記』とは、正しく生きてきた「ヨブ」が突然不幸に見舞われた時の人々と神の対応を描いた、旧約聖書に記されている物語である。ヨブの友人たちとヨブは、神と正義を巡って対立する。しかし、ヨブ記の作者は、神でさえも人間の幸せを選択できるとは限らないというメッセージを込めている。したがって、著者は不運をもたらしているのは神ではないと考えている。

次に、3章では全ての出来事に理由が無いという著者の主張が、4章では悲劇の中から新たな問いを立てる必要性が書かれている。「創世記」で、神は「混沌とした宇宙に秩序と規則」をつくり出した<sup>5</sup>。しかし、著者は「秩序と規則」が行き届いていない「混沌状態<sup>6</sup>」が残っていると言う。そのような「混沌状態」の中で起こる「自然の法則<sup>7</sup>」は神も人間も関与できない現象である。「自然の法則」に道徳観が無いからこそ、人間は理不尽な世界の原因を問いたくなる。しかし、悲劇を「むなしく害だけ<sup>8</sup>」の経験にしないためには、苦しみを意味のあるものに変えたいという結果に重点を置く必要がある。

そして、5章では人間だからこそできる選択の自由について、6章では我々に求められる感情の整理について書かれている。「創世記」のアダムとイブは「善悪を知る木<sup>9</sup>」から実を取って食べた。つまり、善悪を選択できる道徳的な自由は、人間だけが神から与えられた特権なのである。そのため、神も人間の選択を止めることはできない。ところが、人間は理不尽なことにまで自らの「罪意識<sup>10</sup>」を感じてしまう。著者は、怒りの方向を理不尽な「状況

そのもの<sup>11</sup>」へ向け、「だれもが、苦しみや悲しみを味わっている<sup>12</sup>」ことを理解するべきだと述べている。

7章と8章では思考を行動に移した場合の、「ほんとうの」奇跡と宗教の在り方について書かれている。人々は祈りによって同じ感情を共有し、繋がることで苦しみを乗り越えることができる。そして、祈りを構造として人々に提供してきたのが「宗教儀式<sup>13</sup>」である。現代では科学で物事を証明することができるが、そこから「悲しみ」を取り出すことができるのは人間にしかない宗教である。「なぜ、私だけが苦しむのか」と著者は問いながら、苦しみを伴う世界とそれを創った神を赦し、人々を愛する「応答<sup>14</sup>」を繰り返して生き続ける必要性を主張している。

著者は、誰もがヨブやヨブの友人たちの立場になりうると言う<sup>15</sup>。評者自身も、人間関係で悩み不登校になったことや、友人の体調の変化に気付けずに手を差し伸べられなかった経験がある。それゆえ、ヨブの友人たちとヨブの立場や観点を踏まえることで、我々はどのように悲劇と向き合うべきかを思案できるのである。

まず、ヨブの友人たちは「神の意志によってすべてが動いている<sup>16</sup>」と考える立場である。彼らは、ヨブの善よりも神の全能さを信じたかった。もし、彼らがヨブの善を肯定し神の処罰を否定したとすると、ヨブを肯定し神を否定することにもなる。そのため、善を尽くしている人間に劣るような神は全能と言えないのではないかと疑問を抱く<sup>17</sup>。したがって、彼らは「人が神より正しくありえようか<sup>18</sup>」とヨブの善を否定したのである。

評者は、彼らの考えに同意できない。創世記でアダムとイブが実を食べてしまった際、神は人間に苦しみと死を与えた<sup>19</sup>。その実が「善悪を知る木<sup>20</sup>」であったことから、著者は、神は善悪を選択できる自由を人間に与えたと述べている<sup>21</sup>。また、善悪を選択するために考えることは、他の被造物には不可能な人間性といえる<sup>22</sup>。もし人間が神の意志のみによって動いているのであれば、神自らが与えた「選択の自由<sup>23</sup>」を否定することになる。つまり、人間の行動の選択権は、神ではなく人間にある。そのため、「神の意志によってすべてが動いている」とは考えにくいのである。

次に、ヨブは自分の正しさを第一にして「理不尽な世界<sup>24</sup>」に疑問を持つ立場である。ヨブは神の前で善を尽くし「幸いを望んだ」にも拘わらず、「災いが来た」<sup>25</sup>。自分の正義の分だけ神が恵みを与えてくれるとヨブは信じていただろう。しかし、そうではなかった。神は災いをもたらすだけであるため、「理不尽な世界」にヨブは落胆する。「正義や善という限界に縛られない<sup>26</sup>」神に対して「なぜ、わたしに狙いを定められるのですか<sup>27</sup>」と疑問を抱くのである。

評者は、ヨブの意見に対して理解できる点と否定したい点がある。まず、自分が正しいと思いついてしまう点は理解できる。ユダヤ教は、律法を遵守することで神への信仰を証明するという「契約関係<sup>28</sup>」が基盤となっている。そのため、ヨブも律法に従う正しさを示すことで、神への信頼を得られると考えていたのだろう。

一方で、災いの原因が罪や悪と考えている点は否定したい。ヨブに降りかかった災いの中

に、自分の子どもたちが災害で死んでしまったことがあった<sup>29</sup>。著者は、このような悪い出来事の後に残された者には「罪意識」が芽生えると述べている<sup>30</sup>。もし、ヨブが正しく生きることに対してそれほど執着していなかったら、災いは自分の責任ではないかという「罪意識」をもったかもしれない。しかし、ヨブは神に対して直接自分の善行を誓えるほど自らの正しさを意識していた人である。そのため、正しさが認められないのであれば、「自分の罪の証拠<sup>31</sup>」を神に求めたのではないだろうか。ところが、正しく生きているヨブに訪れた災いは、神がもたらしたものではなかった。したがって、人間の行動の選択権は人間自身にあるにも拘わらず、災いの原因が人間にあるとは限らないのである。

ところで、今日の我々は引力によって物が落ちることや薬で病気が治ることを知っている。それは、普遍的な「自然の法則<sup>32</sup>」を明らかにするために、科学が発展してきたからであると著者は言う<sup>33</sup>。例えば、古代の人々にとって日食でさえも「神の警告」と考えるほど「不自然な出来事」であった<sup>34</sup>。しかし、このような「神の証明<sup>35</sup>」の因果関係が科学によって明確にされてきた。そのため、人間の理解できる範囲が広がり、より善を選択しやすくなったともいえる。ところが、物が落ちて負傷したり従来の薬で治らない病気になったりする<sup>36</sup>。つまり、人間だけでなく「選択の自由」を与えた神や、人間が発展させた科学でさえも「自然の法則」には逆らえないのである。

ここで、著者は疑問を原因ではなく結果に向けるべきであると主張する。悲劇を虚しさで終わらせないためには、苦しみに意味を与える必要がある<sup>37</sup>。「なぜ私だけが苦しむのか」といった不条理な現状を誰もが経験したことがあるだろう。その時、人間は善悪を選択するために「悲劇の原因」を問い詰め、怒りの感情を露わにする<sup>38</sup>。しかし、痛みや苦しみに「自然の法則」を我々に知らせる役割がある<sup>39</sup>。つまり、悪によって善への選択肢を見いだすことができるのである。また、善悪を知らない「自然の法則」は、善悪を知る人間を良くも悪くも平等に扱う<sup>40</sup>。したがって、「悲劇の原因」を問うのではなく、悲劇を克服するための方法を問う必要がある。

そのため、著者は不条理な「状況そのもの」へ怒りをぶつけるべきだと述べている<sup>41</sup>。しかし、悲劇の中で怒りの方向を変え、原因を問わないことは困難ではないだろうかと評者は考える。なぜなら、悲劇が不条理ではなく明らかに人為的な場合や、突然の出来事で感情が整理できない場合も考えられるからである。だが、ここで注目したいのは、ヨブにとっては話を聞いてもらうことが慰めになると述べている点である<sup>42</sup>。ヨブは友人たちからの説得や助言ではなく、同情してくれることだけを望んでいた<sup>43</sup>。つまり、悲劇の渦中にいる当事者ではなく周囲の人間こそ、方法を問うために苦しみに寄り添う必要があるのではないだろうか。

我々が隣人と感情を共有する必要性を、宗教では儀式という構造を通して伝えてきた<sup>44</sup>。特定の宗教を信仰していないとしても、大切な人のために「祈る」行為は誰もが経験したことがあるだろう。祈りによって同じ感情を共有する人がいると認識すると、人間は悲しみに直面した時に孤独を感じずに済むのである<sup>45</sup>。そのため、人間は隣人の感情を想像する機会

を、宗教儀礼を通して体験してきたと考えられる。

しかし、近代化によって伝統的な儀礼を行う機会は減ってきている。特に、「死別悲嘆」は共同体ではなく家族内で対処することが望まれるようになった<sup>46</sup>。また、評者は大切なものを失った悲しみを感じるという点において、「死」だけでなく日常の些細な苦痛も「小さな死<sup>47</sup>」という「『喪』の体験<sup>48</sup>」であると考え。したがって、共に生きていくために欠かせない感情の共有を通して、我々は「『喪』の体験」を「生きる糧<sup>49</sup>」とする必要がある。

この本が「神戸女学院の 100 冊」に選ばれたのは、隣人の想いを想像し理解する使命が我々にあるからではないかと評者は考える。神戸女学院では、キリスト教と学院設立の繋がりから、宣教師の先生方が未来の我々に託した「愛神愛隣」の精神を学ぶ。他者に対する善意を問いつけることは、ただ話を聞いてほしかったヨブ、14 歳という若さでこの世を去った著者の息子とその家族、今あなたが思い浮かべたその人、全ての隣人が悲しみの中にある時こそ求められる姿勢である。『なぜ私だけが苦しむのか』。本書は、このように悩む隣人に寄り添い、手を差し伸べる勇気を読者に与えてくれるのである。

---

#### 注

1 ハロルド・S・クシュナー (1998) 『なぜ、私だけが苦しむのか』岩波書店 p.iii

2 同上

3 クシュナー 以下すべて(1998) p.230

4 クシュナー、背表紙

5 クシュナー、p.72

6 クシュナー、p.73

7 クシュナー、p.81

8 クシュナー、p.92

9 クシュナー、p.107

10 クシュナー、p.132

11 クシュナー、p.158

12 クシュナー、p.163

13 クシュナー、p.175

14 クシュナー、p.218

15 クシュナー、p.127

16 クシュナー、p.51

17 クシュナー、p.51

18 『聖書 新共同訳』日本聖書協会 旧約聖書 p.779 ヨブ記 4:17

19 旧約聖書 pp.3-5、創世記 2:11-3:24

20 クシュナー、p.107

21 クシュナー、p.113

22 竹田純郎・森秀樹編 (1997) 『<死生学>入門』株式会社 ナカニシヤ出版 p.23

- 
- 23 クシュナー、 p.113
- 24 クシュナー、 p.55
- 25 旧約聖書 p.814 ヨブ記 30:26
- 26 クシュナー、 p.55
- 27 旧約聖書 p.784 ヨブ記 7:20
- 28 山我哲雄 (2014) 『キリスト教入門』 岩波書店 p.6
- 29 旧約聖書 p.776 ヨブ記 1:19
- 30 クシュナー、 pp.132-134
- 31 クシュナー、 p.133
- 32 クシュナー、 p.81
- 33 クシュナー、 p.82
- 34 クシュナー、 p.82
- 35 クシュナー、 p.81
- 36 クシュナー、 pp.82-83
- 37 クシュナー、 p.92
- 38 クシュナー、 p.153
- 39 クシュナー、 p.89
- 40 クシュナー、 p.83
- 41 クシュナー、 p.158
- 42 旧約聖書 p.802 ヨブ記 21:2
- 43 クシュナー、 p.129
- 44 クシュナー、 pp.175-176
- 45 クシュナー、 p.176
- 46 石丸昌彦、山崎浩司『死生学のフィールド』 放送大学教育振興会 2018年 pp.19.21
- 47 大林雅之 (2019) 『小さな死生学序説 — 「小さな死」 から 「大きな死」 へ —』 p.15  
[file:///C:/Users/Owner/Downloads/TEDK-N15\\_P13-22.pdf](file:///C:/Users/Owner/Downloads/TEDK-N15_P13-22.pdf)
- 48 竹田純郎・森秀樹編 (1997)、 p.9
- 49 同上